

お米がつくる家族の時間

茨城県立水戸第一高等学校附属中学校

一年 高柳 祐梨奈

私が田んぼに始めて足を踏み入れたのは四歳である。ひたちなか海浜公園での田植え・稲刈り体験に参加し、手で一つ一つ苗を植え、大きく成長した稲を鎌で刈り取り、おだかけを手伝った。田んぼから足が抜けなくなっているもちをついたことは話に聞いていたし、腰を低く落として無心で稲を刈っている姿やお

だかけの前で笑顔で映る写真が残っている。

お米が大好きな私のためにと次に両親が考えたのは、田んぼを借りて自分たちでお米作りをすることです。五年前から我が家の恒例行事になった。普段自分たちが何気なく食べているものがどのように作られているのか、農家さんがどのような思いをして作っているのか知ってほしいという理由で、農家さんの力を借りながら家族総出で無農薬での米作りを始めた。三月の寒さが少し残る中での

畔づくりから始まり、種まき、田植えをする。
田植え後は、稲の育ち具合を見ながら、手や
田車での除草を毎週行うとともに、畔の草刈
りをする。毎年やっていてもなかなか慣れず
に体力を使うが、田んぼで出会うドジョウや
オタマジャクシ、コオイムシなどの生き物に
自然の豊かさを感じられて清々しい。その後、
ヒエ取りを行って、稲刈り、乾燥をして一年
に一回の米作りが終わる。こうして家族みん
なで協力して作上げたお米は、世界一と言

ってもいいほどとても美味しい。お米作りは
農家さんに水の管理や稲の様子を見ていただ
いているが、例えば種まきの段階であれば種
の均等な蒔き方から温度管理、時期など、各
段階において経験に基づいたコツを教んでもら
い、試行錯誤しながら美味しいお米作りに向
き合っているのだと教えられた。
私の家の食卓は、自分たちで作ったお米の
他に、庭で育てた野菜も彩る。だから、ご飯
が美味しくないときなんてないのだ。美味し

いご飯を食べると、家族みんなが笑顔になり、今日学校や職場であつた出来事などを口々に話す。そのようなお話がとまらないご飯の時間。私が大好きだ。仕事で忙しい父も、みんなと話したいからと言つてご飯のためだけに帰ってくることもある。そのくらい私の家族にとつて、ご飯を食べる時間は一日を過ごすうえでも大切な時間であり、コミニケーションをたくさん取れる場と言えるだろう。テーブルの上のちいさな空間の中に

「笑顔」が詰ま、ていて、楽しいときはもちろん、悲しいときでも自然と元気が湧いてくるような気がする。

しかし、最近、母も仕事でなかなか帰つてくれず、兄と二人でシトルトのカレーやパスタを食べるときがある。味は美味しいのだが、いつもの食事とはちがつて違つて空気が冷たく感じる。兄と二人でも話をするが、食べ終わつてしまつと、家族みんなでそろつて食

食するときよりあまり長く続かない。それ

に、兄も部活や習い事で帰ってくるのが遅くなる
と、一人でご飯を食べるようになってしま
う。一週間に一度あるかないかぐらいだが、
なんだか満たされない思いになる。

私は、家族揃ってご飯を食べられないだけ
で、こんなに寂しい気持ちになってしまうの
だと気づき驚いた。当たり前前に食べているご
飯には、食材を育てている人たちの思い、料
理を作っている人たちの思い、食卓と一緒に
囲む人たちの思い、それぞれが重なって成り
立っており、その一つでも欠けてしまうと
心が満たされたご飯にはならないのかもしれ
ない。

毎年の米作りを通して、農家さんは自然を
相手に体を酷使しながらお米を作ってくださ
っていると知った。米作りに限らず、野菜や
果物の農家さんも同じだ。農家さんたちの思
いも私達の食卓を豊かにしており感謝を忘れ
てはいけない。